

## 学位請求論文審査報告書

氏名・（本籍地） 善養寺 淳一（群馬県）  
学位の種類 博士（文学）  
学位記の番号 甲第131号  
学位授与の日付 令和3年3月15日  
学位論文題目 古代・中世日本文学に於ける神仙・異界思想の研究  
論文審査委員 主査 小嶋 知善  
副査 大場 朗  
副査 田中 仁  
副査 藤原 克己

### 論文の内容の要旨（1200字以上）

善養寺淳一氏によって提出された学位請求論文（課程博士）『古代・中世日本文学に於ける神仙・異界思想の研究』の内容について、立項して以下に記す。

#### （1）本論文の枚数

当該論文は、40字×40行形式で全232枚にわたって執筆されている。これを400字詰原稿用紙に換算すると928枚に相当する分量である。なお、本論文中には若干の表が挿入されているが、論述のために必要不可欠のものであると判断される。

#### （2）本論文の目次

本論文は、序章・本論（第一部・第二部・第三部・第四部）・結論の構成になっている。以下の通りである。

#### 序 論

#### 本 論 第一部 奈良朝文学に見える神仙・異界思想

概 観 奈良朝神仙・異界思想文学概観

第一章 本朝神仙・異界思想文学前史

第二章 『懐風藻』に於ける吉野仙境観の成立

第三章 『懐風藻』吉野詩に見える神仙思想について

第四章 奈良朝文学に見える他界観念及び境界論

第一部主旨 「憧憬的受容」としての奈良朝神仙・異界思想文学

#### 第二部 平安朝前期文学に見える神仙・異界思想

概 観 平安朝前期神仙・異界思想文学概観

第一章 『三教指歸』虚亡隠士論の神仙世界

第二章 都良香の神仙思想について

付論 『富士山記』の神仙世界

第二部主旨 「批判的受容」としての平安朝前期神仙・異界思想文学

#### 第三部 平安朝中期文学に見える神仙・異界思想

概 観 平安朝中期神仙・異界思想文学概観

第一章 『紀家集』の神仙譚

第二章 『竹取物語』に見える神仙否定の論理

第三章 『続浦島子伝記』に於ける神仙思想について  
第三部主旨 「創造的受容」としての平安朝中期神仙・異界思想文学

第四部 平安朝後期文学に見える神仙・異界思想

概観 平安朝後期神仙・異界思想文学概観

第一章 吉備大臣入唐譚方術考

第二章 『本朝神仙伝』の神仙像について

第四部主旨 「再編的受容」としての平安朝後期神仙・異界思想文学

結 論

(3) 本論文の表記・論述形式

善養寺氏は、「古代・中世日本文学」を対象とする「神仙・異界思想」の研究を進めるにあたって、関係する文献に広くあたり、それらの文献を適切かつ正確に引用している。引用文献の仮名遣いはもとより、漢字および漢文については可能な限り正字体を用いて正確な引用を心掛けている。「注」についても、文献や引用論文の所在、発行年月日等を遺漏なく記している。

(4) 本論文の方法論

先行論文を博捜し吟味を行い、これまでの研究ではあまり目を向けられてこなかった資料や文献にも光を当て、適切な引用に努めている。その上で、自論を展開し、新たな見解を打ち出すことに努めている。

(5) 本論文の内容

本論文、序章・本論（第一部・第二部・第三部・第四部）・結論、各々の概略を次に記す。

本論文における研究目的は、神仙思想が日本文学の作品に如何なる影響を与えたのかという受容問題について、個々の作品に沿って実証的に解明するものである。

その扱う時代の範囲は、奈良朝以前から説き起こし、平安朝後期までの約500年間である。本研究は、これまで殆どなされて来なかった、日本文学への神仙思想の影響の通時的考察を展開し、その時代ごとの特色の把握を試みることにより、先行研究の欠落を補う点で意義あるものと考えられる。

本論考表題にある「異界」については、神仙思想が平安時代には仏教的なものに変容していく点をふまえ、宗教学でいう異界の概念も援用しつつ論じている。

全体を通じて、本論文は日本古代・中世文学と道教の関わりや神仙・異界思想について、文学研究の立場から論及しようとする意欲的な姿勢がうかがえる。また、分析や考察を進める上でも、日本漢文学研究に関する大曾根章介氏や後藤昭雄氏、佐藤道生氏らの諸先学の論考、福永光司氏や増尾伸一郎氏らによる日本における道教受容史に関する研究など、引用文献は幅広い分野に及んでおり、数多くの先行研究に論及した手堅い構成をとっている。

本論文の内容は、形式を時代区分により四部に分ち、各々冒頭に概観、末尾に主旨を配置し、各時代の作品について、国文学を基礎とし、宗教学、歴史学、神話学、民俗学、交通史等にも目配りして論じている。

以下、本論各部各章の要旨と結論について述べる。

第一部第一章では、本朝神仙・異界思想文学前史として、飛鳥時代に於ける道教思想の問題を扱っている。①天皇号問題、②天武帝諡号問題、③斉明帝の土木工事の亀形石造物、④飛鳥岡本の宮都の選地の宗教的意味である。これらは当時の道教、仏教、神道が多元的に存在する状況で、国家の宗教政策の規制を受けつつも奈良朝文学の思想的根元が徐々に形成されていったものである。第二章『懐風藻』に於ける吉野仙境観の成立では、吉野の地が仙境と見做される条件について、①神仙思想の知識、②地形と気象等の風土的条件、③吉野の歴史的条件、④宗教的聖地としての4条件の上に吉野仙境観が成立したと考えられる。第三章『懐風藻』吉野詩に見える神仙思想については、渡来系人の吉田宜の従駕詩の詩句「八石」の先行研究を深化させ、仙菓の総称として詩の意味を解釈している。更にこの詩の傾向は、日本人作者の神仙思想の受容傾向とはやや異なる点を指摘している。第四章奈良朝文学に見える他界観念及び境界論では、所謂浦島伝説について、『丹後国風土記』（逸文）と『万葉集』を取り上げ、上代文学の他界観念について考察している。また、これに附随する境界については、独自の可動的境界の概念を導入し、新たな解釈を行っている。以上、第一部の主旨は、「憧憬的受

容」としての奈良朝神仙・異界思想文学と位置付けている。

第二部第一章『三教指歸』虚亡隠士論の神仙世界では、空海の比較思想書である『三教指歸』中巻虚亡隠士論における道教の受容態度について、窪徳忠の分類法に基づき研究を進めている。その結果、空海は、神仙思想集大成の書『抱朴子』を、『三教指歸』の内容と構成に合わせ、効果的に選択的受容をしているということを解明した。第二章都良香の神仙思想については、『本朝文粹』所収の都良香の対策「神仙」について、出典の分析を通して、良香の漢籍受容と道教の理解度を考察したものである。更に付論『富士山記』の神仙世界では、その文言の典拠と行文を考察し、富士山を素材とした山水記が、良香の日本的仙境の発見に形象化している点を明らかにしている。以上、第二部の主旨は、「批判的受容」としての平安朝前期神仙・異界思想文学と位置付けている。

第三部第一章『紀家集』の神仙譚は、紀長谷雄「白石先生伝」について、有限な生の人間と無限の生の神仙との対比から、奈良時代の神仙憧憬が相対化されていった点を考察している。第二章『竹取物語』に見える神仙否定の論理では、『浦島子伝』との比較構造論的考察により、両者の構造の対照性と時間性・空間性の対照性を究明し、特にこの構造的枠組みが、『竹取物語』の特色たる神仙否定の論理に繋がる点を見出している。第三章『続浦島子伝記』における神仙思想については、坂上高明が加注を施した『続浦島子伝記』の所謂「伝」の部分の『抱朴子』受容に絞って考察している。考察の結果、『抱朴子』受容とその引用には、「断章」以上のかかなり正確な神仙思想の理解があり、それを粗筋に合わせ効果的に配置したことが明らかになった。以上、第三部の主旨は、「創造的受容」としての平安朝中期神仙・異界思想文学と位置付けている。

第四部第一章吉備大臣入唐譚方術考は、吉備真備の入唐譚（『江談抄』）について、その異界への越境、方術の思想的源泉、唐土対日本の対立軸を考察し、さらに大江匡房の異界への関わりと院政期文化の複合的様相について考察したものである。第二章『本朝神仙伝』の神仙像については、仏教的な神仙が描かれる『本朝神仙伝』について、神仙思想変容の要因を探り、院政期の政治体制による社会不安や末法到来等の仏教信仰の新展開、信仰生活の重層性の問題、藤原明衡以来高まる本朝意識等の諸要因がある点を述べている。以上、第四部の主旨は、「再編的受容」としての平安朝後期神仙・異界思想文学と位置付けている。

本論文の結論として導いたことは、神仙思想が、上代に流伝して以来、平安後期まで長期に亘り日本文学の思想的一源泉となり得たということである。時代状況（政治、宗教、文化）の変化の中で、神仙思想自体も、上述した各主旨のあるように変容していったものであることを確認している。

従来の、宗教学・歴史学、また中国哲学・中国思想史の側からの論考などからでは、日本における神仙思想受容の歴史的展開と文学作品への受容解明はいまだ不十分な点がある。本論考によって、各時代の日本文学史における神仙思想の位置付けがなされたと言いうる。

以上

## 審査結果の要旨（1200字以上）

本論文の審査結果を以下に記す。

尚、審査は、主査1名、副査3名によって行われた。公開口述試問についても同様である。

### （1）本論文の学術的意義

本論文は、奈良時代の『懐風藻』の吉野詩、『風土記』と『万葉集』の浦嶋子説話、平安前期の空海『三教指帰』、都良香『神仙策』、紀長谷雄『白石先生伝』、『竹取物語』、『続浦島子伝』、さらに平安後期の大江匡房『江談抄』に見える「吉備大臣入唐譚」と匡房の『本朝神仙伝』等を検討し、奈良・平安朝の文人たちの述作において中国の神仙道教思想や神仙譚・神仙伝がどのように受容され、またそこにどのような日本の変容が加えられたかを考究したものである。

このような中国神仙思想の受容と変容を、奈良・平安朝の文芸的諸作品を通して通史的かつジャンル横断的に検討した研究は、これまで殆どなかったと言ってよいであろう。

善養寺氏はこの論考によって、日本における神仙思想の受容を、奈良時代の憧憬的受容から平安前期の批判的・創造的受容へ、さらに平安後期の再編的受容へというように、大きな変遷の図式の中に跡づけている。

本論文の内容は、善養寺氏も言及するように、「神仙思想が我が国の古代・中世文学にいかなる影響を与えてきたのかという受容問題を、個々の作品において実証的に解明し、さらに神仙・異界思想文学史の構築を試みた」ものである。このような研究は、日本文学史の思想史的分野でこれまで欠けていたところを補う意義あるものである。その大きな論の枠組みは明快であり、日中の文学・思想・宗教・歴史等の広範な領域にわたって博搜された先行研究の引証によって、緻密にして堅固な論が組成されている。

文献や資料を丁寧に読み直して進められる論述に、意欲と熱意が感じられるところも評価できる。また、論文の予備審査において指摘された問題点については、修正ないし補足がなされており、論考の価値を高めている。

### （2）公開口述試問の結果

公開口述試問では、主査および副査が善養寺氏に疑問点を質し説明を求めた。そのいくつかを以下に記す。

1, 第一部第四章の『丹後国風土記』逸文「浦嶋子伝」の論、および第三部第三章の承平二年（931）成立『続浦島子伝記』の論において、「神仙」「異界」という観点にとらわれすぎて、両作品の艶情文学としての一面が閑却されている。さらに、善養寺氏が作品の本体と見做している部分についても、『抱朴子』を出典とする表現を抽出するだけでは、作品の『抱朴子』的な道教的要素しか見えてこないのではなからうか。『続浦島子伝記』が内包する、中唐期に盛んになった艶情・性愛文学に共通する面にも目を向ける必要があるのではなからうか。

2, 第四部で扱っている大江匡房の述作に関して、儒家でありながら怪異に関心を抱き、神仙思想にも陰陽道にも精通していた匡房の多面性を論じようとしている点は評価できる。その上で、匡房は、『本朝神仙伝』においても「吉備真備入唐譚」にしても、徹底的に「本朝」に密着しているところに着目すべきで、その「本朝」意識の一貫性について強調すべきではないか。

その他、論述に対する質問も幾つか出されたが、善養寺氏はそれらに対して、本論文において論述しきれなかったことも補いながら丁寧に答えた。

上記1,2,やその他の指摘については、今後さらなる本文の論究と資料調査などを進め、論証の精密さを向上させることにより、十分に克服されるものであると期待される。

本論文の真価をさらに増すために、探究や検証、加筆などを今後の課題として、公開口述試問を終えた。

本論文の審査委員は、提出された論文の評価、さらに公開口述試問の結果を踏まえ、慎重な審議を行なった。

その結果、本論文が課程博士の学位を受けるに十分値する優れた論文であることを、全員の総意として確認した。

以上

